だれもが過ごしやすい社会へ

甲斐市立竜王中学校三年　　近藤　美空

「それって偏見じゃない？」
朝食を食べながら血液型と性格について話していた私に父が言った言葉だ。一般に、性格と生まれ持った血液型に、ある一定の傾向があるという見方からこのような考えが世の中に根づいている。しかし、A 型だからといってすべての人が真面目というわけではないし、O 型だからといってみんながおおらかなわけではないことは私にも分かる。でも私が「A 型だ」と言えば、「真面目だね」と血液型でくくられることは多い。その人のことをよく知る前に、その血液型ならあなたはこういう性格だ、と決めつけることは、時として「偏見」にあたることなんだ、と朝の父の一言は私に気づかせてくれた。

自分たちが気づかぬ間に偏見にとらわれてしまっていることは思っているよりもたくさんあるように感じる。

例えば、男女の性差について、先日気になる新聞記事があった。そこには、女性の権利についての意見として、自分が中学生の頃、男子ばかりのサッカー部に入部し、練習よりも水の準備などマネージャーとしての仕事を求められることが多かったという女性の話が載っていた。サッカーがしたくて入部したのに、女子だからという理由でマネージャーの仕事を多くさせられるのは、納得がいかなかったと思う。女子だから男子より体力面では劣ることは確かでも、男子と同じようにサッカーをさせてもらえなかったということに、私もさみしい気持ちになった。

その記事を読んだとき、社会の公民の授業の中で配られたプリントのことを思い出した。それは男女格差を数値化した「ジェンダーギャップ指数」が日本は調査対象になった１４６か国中１１６位だった、というものだった。日本は先進７カ国でも、東アジア太平洋地域諸国でも最下位ということだった。教育の部門では１位であるのに対して、政治・経済の部門ではそれぞれ１３９位・１２１位と低い水準であるそうだ。この記事を学校の授業で見たとき、私たちは今、男女格差の少ない教育を受け、環境にほとんど差がないように感じていたが、社会に出ると、まだまだ男女格差が残っていることを知り、残念さとともに「どうしてなんだろう？」という疑問が浮かんできた。

夏休み中、私は『水を縫う』という本を読んだ。その本の中でも様々なこと

への「思いこみ」や「偏見」にとらわれ、息苦しさを感じている主人公や友人、家族がでてきた。主人公は刺繍をすることが趣味だが、母親やクラスメイトから男らしいスポーツを習って欲しかった、どうして男なのに手先が器用なのか、と言われてしまう。しかし友人らに自分の施した刺繍を見せ、褒め認められたことから少しずつ、はっきりと自分の好きなことを「好き」と言えるようになっていく。

また、彼の姉は逆に過去の苦い経験から、女の子らしいフリルやリボン、身体のラインがでる服や腕、脚のでる服など、世の中一般で言われている「かわいい」を嫌っていた。そんな彼女が結婚式を挙げることになり、自分の思い描くウエディングドレスをつくる過程から自分が心地よいものを見つけ、今の自分なりの「かわいい」「好き」を追求していく姿が描かれていた。

この本を読み、「男だから」「女だから」とか「年を取っているから」という理由で諦めたり、好きだという思いを隠したりしなくてよい社会になってほしいと思った。そのためには、偏見にとらわれず、個人を尊重するように、私たちの「見方」を変えていく必要があるのではないか、と思う。

人には、自分が打ち込める、好きだと思うことや時間があると思う。それは人それぞれで、性格や血液型、年齢などは関係ない。しかし、それを誰かに認めてもらうとしたら、心の底から好きなものを声にだして言うことに自信を持てない人もいるのではないだろうか。言ったらどう思われるか、受け入れてもらえるか分からず、言い出せない人も多いのではないだろうか。そのような環境をつくってしまっているのは、私たちが気づかぬ間に何気なく持った「固定概念」「思い込み」そして「偏見」ではないだろうか。決めつけを取り除き、柔軟な心でその人を認め、受け入れることが、人を尊重し、生きやすい社会をつくっていく一歩になると感じた。